Nakamura Senjaku 中村扇雀

三代目扇雀を生きる

論創社

プロローグ——大阪の夜

ここ数年来、感じたことのないほど暖かい、冬の夜だった。二〇一六年一月、私は両親、そして友人であり役者仲間でもある男と、大阪は北新地の料理屋にいた。

思えば、両親とこうして酒を酌み交わすのも実にしばらくぶりだ。

親父とお袋の前には、スーツにネクタイをきつく締め、恐縮した面持ちの男が座っている。両親は、私の隣にいる男の緊張をほぐそうと、私の誕生の秘話を披露している。親父が、「この子はね、あんたの曾(ひい)おじいさんが、私を北海道の巡業に連れて行ってくれたときに、できた子なんだ。曾おじいさんには可愛がってもらったよ」と言えば、お袋がすか

さず応じる。「そうそう、登別温泉だったかしら。私も巡業に同行したのよ」

そうか、俺がこの世に生を受けた地は、北海道だったのか……。五十歳も半ばを過ぎた自分が、母の胎内に宿った瞬間に思いが飛んだ。

俺はこの両親から生まれ、人生の折り返し地点を過ぎた今、何をしてきたのだろう。これから何をするのだろう。

私は、歌舞伎役者の三代目中村扇雀だ。そして、親父は歌舞伎役者の四代目坂田藤十郎、お袋は元女優で政治家の扇千景である。

盃を重ねるうちに、隣の男の緊張も緩んできたようだ。

彼は映像の世界において、その実力と存在感で右に出るものはいないと言われる俳優の香川照之こと、歌舞伎役者の九代目市川中車さんである。私の両親は、彼の曾祖父である先代の猿翁さんとの縁と、お母さんである女優・浜木綿子さんもお袋と同じ宝塚歌劇団出身の関西人という共通点があることから、彼の歌舞伎界入りを大変喜び、一席設けたと

いうわけだ。

これからまず、ほろ酔い気分で思い出を語っている両親と私についての話をしよう。

プロローグ——大阪の夜　1

第一章

学業優先の御曹司

両親の英断◆2
祖父・二代目鴈治郎と初舞台◆8
「会長」と呼ばれた高校時代◆12
体育会で鍛え抜いた役者魂◆17
アルバイト経験豊富な歌舞伎役者◆22
歌舞伎界に「就職」◆26
稽古猛進の日々◆29
ひばり姉と喜和子姉の横顔◆32
初めての挫折◆34
市川中車さんの姿◆36

第二章 役者の運命（さだめ）

「扇雀」襲名 ◆ 40
鴈治郎家の故郷 ◆ 48
虎之介に繋ぐ芸の道 ◆ 54
上方歌舞伎のこれから ◆ 57
転機となった二つの舞台 ◆ 60
哲明さんの死 ◆ 67
役者という職業 ◆ 71
梨園の世界 ◆ 73

第三章 扇雀流芝居づくり

歌舞伎役者の基礎体力 ◆ 78
演出家としての目 ◆ 82

私の『藤十郎の恋』◆84
舞踊の難しさ◆87
女形と立役を兼ねる◆92
喜劇を演じる◆95
四代目坂田藤十郎◆99
伝説の名優たちとの思い出◆104

第四章 三六五日舞台の軌跡

役者という仕事◆112
串田監督版お岩様◆114
原点回帰の芝居小屋◆117
野田歌舞伎◆121
鴈治郎家ゆかりの地◆127
芝居の神様が宿る金丸座◆131
扇雀の舞台裏◆133

第五章 伝統芸能を娯楽に

お客様を迎える空間づくり ◆ 140
おもてなしの心遣い ◆ 142
歌舞伎ができるまで ◆ 145
世界から見た歌舞伎 ◆ 147

第六章 人生語り

五十歳を過ぎて ◆ 154
志は「離見の見」 ◆ 156
運命決定論 ◆ 158
思考解放のすすめ ◆ 160
宇宙時間で見る一瞬の命 ◆ 162

エピローグ——渋谷の夜　166
あとがき　168

第一章　学業優先の御曹司

両親の英断

若く美しかった親父とお袋の、仲睦まじい北海道巡業から十月十日（とつきとおか）を経て、私は一九六〇年十二月十九日、東京で誕生した。

原風景というのだろうか。いちばん最初の記憶は、お袋のお腹の中から見ていた、南麻布の愛育病院の景色だ。お袋はここで私を出産した。就学時健康診断で、お手伝いさんに連れられ、生まれて以来初めてこの病院に訪れた私は、「ボク、ここ知ってるよ。この階段を上がったところに、赤ちゃんがたくさん寝ているんだよね？」と、得意げに話して周囲を驚かせたそうだ。まだ古い愛育病院の薄暗い階段の辺り、ガラス張りの新生児室の雰囲気まで、ありありと覚えている。

私は、両親の仲人でもある劇作家の川口松太郎先生に「浩太郎（ひろたろう）」と名付けられた。

先生は、浩宮殿下のご誕生の年であったことから一字いただき、「浩（ひろ）」という名を持ってきてくださった。しかし、「林浩（はやしひろ）」では短かすぎて収まりがよくないという理由で、私は「林浩太郎（はやしひろたろう）」となった。「太郎」は川口先生、親父（宏太郎）と曾祖父（玉太郎）の本名にちなんでいる。

「お父様との思い出は？」とよく聞かれるのだが、私だけでなくおそらく兄貴も、親父との親子らしい思い出というものを持たずにいる。

キャッチボールをしようとしたら、親父はボールが投げられなかったこと……くらいだろうか。実際のところ、親父はずっと役者として昼は舞台、夜は映画と多忙を極め、家にいる時間はほとんどなかった。

またお袋は、私が生まれてから、一週間ほどで女優の仕事を再開した。私たちは、住み込みのお手伝いさんらに育てられた。母との思い出もあまりなくて、雑誌の撮影で家にいたときくらいしか、一緒に過ごした記憶はない。

女性は専業主婦として家事・育児をするのが当たり前だった昭和三十年代、両親の姿は

まさに時代の先を行くカップルだった。友人の家に遊びに行くと、いつも彼らのお母さんが出迎えてくれて、何かと世話を焼いてくれる。寂しくなかったのかと尋ねられたら、ないわけでははない。しかしながら、友達を妬んだり、ひねくれたりせずに育つことができたのは、両親の「家族四人の暮らしを守りたい」という祈りにも似た願いを、凛とした二人の、役者らしい背中に見続けていたからだと思う。

そんな両親の――と言っても、親父は良くも悪くも、子供たちのことはすべてお袋に任せていたから、お袋のというべきだろう――教育方針とは、歌舞伎役者の家からすれば、極めて異例のものだった。

我が成駒家（我が家の屋号は「成駒屋」だったのだが、二〇一五年、兄が四代目鴈治郎を襲名したのを機に、中村鴈治郎一門は「成駒家」に変更した。これは初代鴈治郎が、「成駒屋」を屋号としていた五代目中村歌右衛門への気遣いから「成駒家」としていた時期があったからである。本書では、二〇一五年以前の記述には「成駒屋」を、それ以降については「成駒家」を使用する）・鴈治郎家は上方の歌舞伎役者の家系で、代々上方の地で暮らしてきた。しかし、

あとがき

五十六歳という年齢は、歌舞伎の世界では中堅と呼ばれる世代だ。あと二十年、いや三十年、私は舞台に立っていられるのだろうか。一般的に定年とされるまでに、あと十年しか残されていない。また、哲明（十八代目中村勘三郎）さん、夏雄にいさん（十二代目市川團十郎）、寿（十代目坂東三津五郎）さんと、立て続けに先輩方が亡くなり、役者として一つの転機を迎えていた。

このタイミングで、私のこれまで歩んできた歌舞伎人生を一冊の本にまとめる機会をいただいたのは、巡り合わせだと感じずにはいられなかった。

役者とは、舞台の役を通してお客様と触れ合い、演じる役の中に扇雀を観ていただくも

のだ。素の自分が、決して役に出てはならないと考えている。

その一方で、舞台を離れた私に会ってみたいと思われるお客様が、楽屋口の外でお待ちのときがある。お客様と直接お会いできることは、本当に嬉しい。扇雀という役者を演じる私の人となりに興味を抱いてくださったのだろう。

本書を、扇雀という役者の参考資料と思っていただければ幸いだ。

今年八月、歌舞伎座『廓噺山名屋浦里』の千穐楽では、通常はないカーテンコールが起こり、幕を開けると満員のお客様が総立ちで、我々を迎えてくださった。演出にはない一期一会の瞬間に体が震えた。お客様とスタッフに支えられて、この感動を味わえる自分の人生（職業）を心から喜んだ。

同時に、この舞台に立っている自分は、どこから来てどこへ行くのだろうと思わずにはいられなかった。本書の取材を通して、あらためて自己を再発見することができ、その問いを記す機会をいただいた。

出版にあたり、論創社・社長の森下紀夫氏、そして編集担当の中澤明子氏、私のとりとめもない話に辛抱強く耐えてくれたライターの三尋木（みひろぎ）志保氏に、この場をお借りして心から御礼を申し上げたい。

この本を手に取っていただいた方々へ、最後までお付き合いくださり、ありがとうございました。

皆さま、またどこかで役者・中村扇雀とお会いしましょう。

二〇一六年十二月

三代目中村扇雀

❖著者略歴

中村扇雀（なかむら・せんじゃく）

一九六〇年十二月十九日東京生まれ。四代目坂田藤十郎、扇千景の次男。兄は四代目中村鴈治郎。長男は中村虎之介。

一九六七年十一月歌舞伎座『紅梅曾我』の箱王丸と『時雨の炬燵』の倅勘太郎で中村浩太郎を名乗り初舞台。

一九六九年十一月国立劇場『椿説弓張月』の島君を最後に、学業優先のため休業。

一九八三年三月慶應義塾大学法学部政治学科卒業。在学中は体育会ゴルフ部に在籍。

一九八三年五月京都南座にて『土屋主税』の河瀬六弥で舞台復帰。

一九九五年一月大阪・中座『本朝廿四孝』の八重垣姫と『曾根崎心中』の徳兵衛で三代目中村扇雀を襲名。

写真：小林正明（一一〇頁）
花房　遼（七六・一三七・一六五頁）

協力：松竹株式会社

三代目扇雀を生きる

二〇一七年二月二〇日　初版第一刷印刷
二〇一七年二月二五日　初版第一刷発行

著　者　中村扇雀

発行者　森下紀夫
発行所　論創社
〒一〇一－〇〇五一
東京都千代田区神田神保町二－二三　北井ビル
電　話〇三－三二二六四－五二五四
FAX〇三－三二二六四－五二三二
web. http//www.ronso.co.jp/
振替　〇〇一六〇－一－一五五二六六

組版・装幀　永井佳乃
印刷・製本　中央精版印刷
©Nakamura Senjaku 2017 Printed in Japan.
ISBN978-4-8460-1584-8
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。